

めいめいの言葉で

奨励	水谷 憲【みずたに・けん】
奨励者紹介	日本キリスト教団久宝教会担任教師 NP0法人みのリコミュニケーション職員

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、^①霊、が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話したした。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もある。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

（使徒言行録 2章1-13節）

お菓子の名前かと思った

キリスト教には大きなお祝いの日が三つあります。一つはキリストがこの世に生まれたことを祝うクリスマス。もう一つはキリストが死から復活したことを祝うイースター。そして最後の一つが、先日の日曜日がその日だったのですが、復活のキリストが昇天された後、かねてから言っておられた約束の聖霊が弟子たちの上に降（くだ）った日、今でいう「キリスト教会」の原型が誕生した日、すなわち聖霊降臨日、ペンテコステです。しかしこのペンテコステは三大祝日の一つではあるものの、クリスマスやイースターのように盛大に祝うことなく、普通にスルーしているようなキリスト教会もあったりするわけです。それは中身の分かりにくさからくる知名度の低さにも関係があるのかもしれませんが。私なんか、20年ほど前に初めて教会に通い始めたころ、ペンテコステがどうのこうのと教会の人たちが話すのを聞いたときに、ちょうどそのころは「パンナコッタ」というお菓子が大流行だったこともあり、何かおいしいデザートの話でもしているのかと思ったものでした。確かに、クリスマスやイースターはキリストがお生まれになったとかよみがえられたとか、何を祝う日か分かりやすいです。しかしペンテコステとなると、もちろん「教会のお誕生日」という言い方はされますが、教会が誕生したこと、キリストの弟子たちに聖霊が降ったということが、私たちにとって何でそんなに大事なのか、実はよく分からなかったりするわけです。ですから今日は、このペンテコステの出来事について一緒に考えることができればと思っています。

聖霊降臨の出来事

神の子であるイエス・キリストは、皆さんご存じの十字架による死からの復活を遂げた後、40日に渡って弟子たちの前に現れ、神の国について話されました。そしてそんなあるとき、復活のイエスは弟子たちに言われました。「エルサレムを離れず、前に私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなた方は間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである」。そしてイエスが天へ昇られてから10日後、その約束が成就しました。すなわち、先ほどお読みした今日のこの聖霊降臨の出来事が起こったわけです。このペンテコステ、聖霊が降る前は「五旬祭」と呼ばれていました。大麦の収穫感謝のお祭りだったのです。その五旬祭の日に、弟子たちが集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響きわたり、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまったと。そして一同は聖霊に満たされ、^②霊、が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話したしたといっています。これが復活のキリストがかねてから弟子たちに約束していた聖霊だったわけです。

「一つになって集まっている」とは、きっとこの礼拝のような状況、皆で聖書を読んだり心を合わせて祈りを重ねているところだったのでしょうか。そこに突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、家中に響いたのだと。ビュービューかゴーゴーか分かりませんが、ともかく耳をつんざくような激しい音だったのではないのでしょうか。さらに、炎のような舌が現れて瞬く間に分かれ、それぞれの頭の上に留まったわけです。あかあかと燃えるような輝きをもった舌のようなものです。「舌のような炎」ではなく「炎のような舌」です。そんなローリング・ストーンズのマークのようなものが突然現れて皆の頭の上に浮かぶ様子なんて、想像しただけで気持ち悪い。しかしよく考えてみると、この聖霊降臨という出来事は、視覚にも聴覚にも激しく訴えかけてくる物凄い事件であったわけです。おいしいお菓子和動違っている場合じゃない。

感銘を与えた「言葉」

そしてその音を聞きつけて集まってきた人びとが見たのは、ガリラヤ人のはずなのにさまざまな土地の言葉を話す弟子たちの姿でした。彼らはそれぞれ、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて驚き怪しんだとあります。この「驚き怪しんで」という言葉について、カトリックの本田哲郎神父、この方は1989年より大阪の釜ヶ崎で、日雇い労働者の姿に学びつつ聖書を読みなおし、また労働者たちの生活を支援する活動をしておられる方ですが、彼はこの7節の「驚き怪しんで」という言葉を「驚き、感銘を受けて」と訳しておられます。人びとは感銘を受けたのです。弟子たちが神の偉大な業について、自分のなつかしい故郷の言葉で語っていたからです。私はかつて熊本に7年ほど住んでいたことがあり、今でもかなり思い入れのある土地なのですが、関西暮らしがずいぶん長くなった最近、熊本弁を聞くことも話すこともめったになくなりました。しかし時々何かの偶然で熊本弁（特有の言葉であったリイントネーションであったり）を耳にしたとき、私はかつて熊本で友人たちと楽しく遊んでいたころの記憶がよみがえって、強い感銘を受けることがあるのです。うっとりするような感覚です。今日の聖書のこの人たちが、きっとそんな感覚でこの言葉を聞いたのかもしれない。

このとき弟子たちの上に降ったのは、先ほども言いましたが「炎のような舌」でした。炎の姿形をした聖霊ではなく、舌の姿形をした聖霊です。それは一体何を意味しているのか。それは、舌の姿をした聖霊によって、弟子たち一人ひとりに、舌に象徴されるところの「言葉」が与えられたことを意味しているのではないのでしょうか。それを聞いていた人たちが感銘を受けたのは、てんでばらばらに意味の分からない言葉が話されているなかにも、自分の故郷の言葉のように、自分に理解できる言葉で話をしてきている弟子がいたからではなかったのでしょうか。

私たちは、なかなかお互いにお互いを理解し合うことが難しい現代に生きています。同じ日本語を使っている、言葉の通じない人、いません。世代が違うために言葉が通じないと感じることもあるかもしれませんが。右とか左とか思想の違いもあるでしょう。文系と理系、草食系とガテン系、巨人ファンと阪神ファン・・・単に趣味が違うからということもあるかもしれません。そしてそのなかで私たちはしばしば「この人にこんな話をしても聞いてもらえないだろう」「この人に自分のことや自分の思いをいくら一生懸命語っても理解してもらえないだろう」「この人とは話すだけ時間と労力の無駄だ」と最初から諦めて、自分の殻に閉じこもったりすることがあるかもしれません。あるいは、自分の価値観こそが正しく、それが分からない奴は敵だと人を裁き、ぼんやりと切り捨ててしまったりすることもあるかもしれません。しかし今日の聖書は私たちに語るのです。聖霊が注がれることによって私たちは「言葉」が与えられるのだと。その言葉は多くの人には相変わらず通じないかもしれませんが。しかし弟子たちの語る言葉を自分の故郷の言葉のように感銘を受けつつ聞いた人がいたように、聖霊によって力づけられた私たちの言葉も、通じる人が必ずどこかにいるはずなのです。理解してくれる人が必ずどこかにいるはずなのです。理解できなくとも、共感をもって耳を傾けてくれる人が必ずどこかにいるはずなのです。同じ日本語で話しているのに互いになかなかみ合わない、自分の思いを尽くした言葉がなかなか通じない、そういう今の世の中だからこそ私たちは、たとえ意見が違ってもそれを認め合い尊重し合い、対話することのできる仲間を一人ずつでも増やしていくことをあきらめてはいけないと思うのです。そしてその、隣人と分かり合うために誠実に言葉を紡ぎだそうとする作業こそが、聖霊の助けを願い求める作業であり、そこに必ず約束の聖霊は降されるのに違いないと私は信じています。聖霊は何の祈りも叫びもないところに突然注がれるわけではない。今日のこの弟子たちが一つになって熱心に聖霊の注ぎを、キリストの守りを、神の導きを祈り求めているように、私たちがさまざまなことで悩み、もがき苦しみつつ出口を求めるとき、神はきっと聖霊を送って応えてくださるのだらうと思っています。

語りたいものはありますか？

旧約聖書のヨエル書3章1―2節には、こんな預言があります。これは今日の使徒言行録においても、後ほどペトロが引用している箇所でもあります。「その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは／奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ。」霊が注がれることによって、私たちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見るのだと預言されています。私たちは聖霊によって力づけられたときに思い切って語るることのできるような夢や幻をもっているのでしょうか。私たちは普段から夢や幻というものを軽く考えてはいないのでしょうか。私たちは隣人とつながろうと一生懸命、誠実に言葉を紡ぎだそうとするなかで、もっと夢や幻を大胆に語っていききたいものだと思います。「この世からあらゆる差別がなくなっただけなのに」「戦争やあらゆる争い、憎しみをなくしたい」「ヒビトみたいに宇宙に行きたい!」「ブラック・ジャックのような医者になりたい」「大金持ちになりたい」。何でもいいんです。大金持ちでもいいんです。大金持ちになってどう生きるか、どうするのが大事なんです。それが本当に神の御心と同じならば、きっとその道は備えられるでしょう。皆さんには語れる夢がありますか。夢や幻を大胆に語っていきましょう。たとえ周りの大多数から「そんなのきれいごとだ」「無理無理」「酔っぱらいのたわ言と一緒だ」などと言われようと、その言葉を理解してくれる人は必ずいる。共感してくれる人は必ずどこかにいる。イエスのどうしようもなかった弟子たちがイエスの復活後、聖霊を注がれることによって言葉を与えられ、理解者や仲間を増やしていったように、きっと私たちにも夢や幻、思いを分かち合える人がたくさん必ずいます。私たちはそこに希望をもって、さまざまな祈りや夢、幻をそれぞれの言葉で発信していく者とされたいと思います。ペンテコステは、そのことが必ず成就するということが証明された、大きな意味をもつ日ですから、私たちも聖霊の注ぎを待ち望みたいと思います。

